

公開授業科目： 「感性工学」(大学院共通科目)  
授業担当教員： 経営情報系 アーシュ ボーダ 准教授  
開講日時・場所： 平成21年12月16日(水) 1限、機械棟538講義室

## 授業について

共通教育センターの対象科目の中で大学院共通科目を初めて公開授業とした。授業は約30分の講義とこの科目の最終回として1グループ当たり10分程度を目安とした学生による発表会で構成されていた。授業は留学生も多数受講しており、留学生向けには英語を交え、日本人には日本語を用いた和英両用の形式で進められた。最初に一般人には馴染みの薄い「感性工学」という用語の説明があった。「感性工学」という用語はこの授業の造語ではなく40年近くも前に使われ始めた専門用語であることには驚かされた。授業では専門系に所属する学生に対し感性工学を如何に活用すべきであるのかを理解させることに重点を置いていた。専門系の技術者が開発した技術を組み込んだ製品を上市するにあたり、感性は非常に重要な要素であり、如何に良い技術であっても、製品が感性を意識した、洗練されたデザインでなければヒット商品や評価される構造物にはなり得ず、一般人には受け入れられないことを説くものであった。感性工学では、印象は特に重要で、世界中の色々な文化背景を持つ人々に受け入れられることも必要であり、上手な統計的な取り扱いをすることが必須であることも示された。この授業ではパソコンを全員に配置した教室を講義室として使用しており、受講学生はそれぞれがまちなちにパソコンをつけて受講し、適宜授業資料をインターネットを通じて取得して、復習を行えることは大きなメリットである。ここには授業に飽きさせず、居眠りをさせないアーシュ先生の工夫があったことがわかった。学生の発表に対する学生からの質疑は活発で、言いたいことを言い合える雰囲気がある授業であった。これはこの授業が学生同士の議論を奨励する授業形態を取っていることに起因している。学生の発表では与えられた時間を守れないものもあり、学生の自主性を重視する良い面もある一方で、時間に対する意識と授業の順調な進行に危うさを感じる部分もあった。また留学生の発表では全世界共通の感性ではなく、長岡地域での感性に限定して理解している面が気になった。

この授業では日本人学生に英語の理解を深めさせることや留学生に日本語を理解させることも意識していた。留学生には日本人が普段は意識しにくい日本文化の伝統とその良さを理解させることにより、異文化理解、自国の文化への組み込み、さらには自国の繁栄に繋げることができるように工夫しているとのことであった。これはアーシュ先生が自国の文化と日本の文化の違いから日本文化に学び、その良さを自国文化に取り入れるべきだと考えておられることによるものである。

この授業は各専門科目と共通科目を結びつけて各専門分野で研究開発した技術や製品、構造物を最も効果的にアピールするために必要で、理科系の学生に不足しがちな科学技術以外にもの売るためには何が必要なのかを考えさせる意義のある授業である。外国人教員らしく日本人学生への英語教育、留学生への日本語教育も含めて、学生の緊張感を保ちながら、製品や構造物のデザイン性の重要性を中心に感性工学を理解させ、将来性のある技術者養成に役立てることは本学の技術者教育に大いに貢献するものである。